

実例にみられる日本語の男女差

— 電話による親しい同性同士の私的な会話の分析から —

本 田 明 子

はじめに

日本語は一般に男女によって話すことばに違いがある言語だといわれており、性差に関してさまざまな研究がなされている。これまでの研究のなかでは日本語の性差は人称代名詞と終助詞にあらわれる率が高く（井出1982a : 152）、女性は断定を避け（益岡・田窪1989）、男性より丁寧なことばを使う傾向があることなどが指摘されている。そうした数多くの性差に関する研究のなかで、自然会話をデータとして性差の存在を明らかにするといった傾向の研究はそれほど多いとはいえないようである。自然会話を研究の対象としたものであっても人称や終助詞といった言語形式に着目したものが多く、談話の構造といった面に関するものはまだ充分とはいえないように思われる。しかし、断定を避けたり、丁寧な表現をするといった特徴は言語形式だけではなく、会話の進行上のストラテジーといった面にも何らかの影響をもたらすものと思われ、日本語の性差の全体像を明らかにするためにはそうした点に関する研究も必要なのではないだろうか。そこで、電話による親しい同性同士の私的な会話という実例を資料として分析をおこない、言語形式にみられる男女差と話題の展開といったストラテジー上の男女差との係わりを考えることを目的として研究をおこなった。

1. 研究の方法

1. 1 本研究の立場

本研究は、電話による実際の会話を資料として、女性同士の対話と男性同士の対話にみられる差について検討するものである。資料とした対話につい

ては、話し手の性別以外の要素、すなわち、電話による親しい同性同士の対話という場面、話し手の年代、学歴、職業経験などの属性はできるだけ同質になるようにこころがけた。しかし、実際の対話という性質上、性別以外の要素を全く同じにすることは難しく、資料の数も少ないため、話し手の個性の影響も大きく、女性の対話と男性の対話にあらわれた差が性別を原因とする差だと断言することはできない。そこで本研究では、性別が原因で生じることばの違いを「性差」とよび、実際の言語資料のなかで女性の対話と男性の対話の間にみられたことばの違いを「男女差」とよぶこととし、「男女差」と「性差」を区別して考える立場をとる。本研究でみられた男女差が性差であることを証明するためにはさらに資料の数を増やして検証する必要があるが、男女差があるということは性差の存在を示唆する証拠になりうるものとする。

1. 2 資料について

1. 2. 1 資料の収集

1991年7月から、12月にかけて、本研究者の自宅と協力してくれた友人の自宅において資料の収集をおこなった。収集には通話録音機能をもつ電話機をもちいた。録音の対象は、相手が日本語を母語とし、プライバシーの問題がないような通話とした。収集した資料は60分テープでおよそ10本ほどになるが、通話相手の条件などを考慮して以下の資料を分析の対象とした。録音の状態はおおむね良好で、騒音あるいは機材の不備が原因で聞き取りにくいところはなかった。

資料1（女性）

対話者	F1	女性	20代後半	高校教員
	F2	女性	20代後半	大学院生

資料2（女性）

対話者	F2	女性	20代後半	大学院生
	F3	女性	30代前半	大学院生

資料 3 (男性)

対話者 M1 男性 30代前半 公務員

M2 男性 30代前半 会社員

資料 4 (男性)

対話者 M1 男性 30代前半 公務員

M3 男性 30代前半 会社員

1.2.2 資料の扱い方

(1) 文字化

テープに録音した資料の文字化のさいには、できるだけ原音に忠実におこなうことをこころがけた。ただし、笑い声・ため息などは、(笑い)(ため息)などと注記するにとどめた。また、「へー」「ああ」などのあいづちはよく聞くと、文字では表現できないような音に聞こえる場合があったが、一般に擬態語擬音語としてもちいられている表記に従った。

すべて会話体の資料なので一発話（「(2) 発話の定義」を参照）ごとに改行し、発話のおわりには句点をうち、息継ぎなどのポーズは読点であらわした。二人が同時に話したり、途中にあいづちがはいったりという場合は以下の原則にもとづいて記述した。

- a 発話の途中に相手の発話が重なって聞き取れなくなった場合、聞き取れない部分を「……」とする。
- b 発話の途中のあいづちは、その位置に「(F2: はい)」を挿入する。
- c 発話の区切れのあいづちは、行を変えて「F2: はい」とするが、句点はうたない。

(2) 発話の定義

談話の単位についてはさまざまな提案がなされているが、ここでは次のような基準で発話を区切った。

《原 則》

ひとりの話し手によるひとまとまりの音声連続で対話の相手が話し始

め、turnの交替が起こるまでを一発話とする。

ひとまとまりの音声連続とは

- a 音声的なまとまりがあること
- b ある程度 of 話題のまとまりがあること
- c ある程度 of 統語上のまとまりがあること

turnの交替が起こったと判断したのは次のような場合である。

- a 現時点 of 話し手の音声と重ならず to 相手が話しはじめたとき
- b 現時点 of 話し手が発話を終えて1秒以上の間が空いたとき
- c 現時点 of 話し手の音声と重なって相手が話しはじめ、話し手が話をやめたとき
- d 現時点 of 話し手が話の途中でポーズをおいたとき、相手が別の話をはじめて話題がかわったとき

以下の場合 は turnの交替とは認めなかった。

- a 現時点 of 話し手と完全に重なるように、相手が「はい」「ええ」「うん」などの一単語を発したとき
- b 現時点 of 話し手の途中 of ポーズに、相手が「はい」「ええ」「うん」など、話を聞いていることを示す以上の積極的な意味をもたない一単語を発したとき

ただし、「はい」「ええ」「うん」などが問いかけに対する答としての肯定の意味をもつときと、話し手の発話が完全におわり、聞き手が自分のturnを受けたことを示すような役割を果たすときは一発話と認めた。

1. 3 分析項目の設定

1. 3. 1 分析の観点

話しことばにおける男女差はこれまで、女性の方が男性より丁寧なことばを使う傾向があること（井出他1985 他）、断定や命令を避けて婉曲な表現を好むこと（益岡・田窪1989）などが指摘されている。また、文字化の作業の過程で男性同士の会話と女性同士の会話とでは一つひとつの発話

の長さ、話題の展開のきっかけとなる発話の種類などにそれぞれの特徴があるのではないかと感じられた。そこで、発話の長さ、発話の終末部の形（丁寧、断定、婉曲）、発話の種類（質問・倒置など）という形式面と、話題がどのように展開していくかという談話の進め方、そしてこの両者の関連について調べることにした。

以下が分析の観点である。

形式

- a 一発話の長さ
- b 発話の終末部の形
- c 発話の種類

談話の進め方

- d 話題の展開

1.3.2 分析の項目

分析の観点にもとづいて以下のように分析項目を設定した。

(1) 長さ

単位は文節数とする。文節の区切り方は学校文法でいう「文節」の基準に二、三の変更を加えた。その変更点とは、「しておく」「やってみる」などいわゆる補助の文節を合わせて一文節を数えたことと、「という」「として」「について」などを格助詞相当句と考え格助詞に準じる扱いをしたことである。これは話しことばの場合、補助の文節は縮約形がもちいられるなど、ひとまとまりとして発音される場合が多いことを考慮したものである。

しかし、この基準には「あの本」を二文節と数えるのに対して、「なっちゃってるからさ」は一文節になるなど、長さを比較するさいの単位としては問題が残る。

(2) 終末部の形態

各発話の最終部にあたる部分を品詞・活用別に分類する。

分類項目＝用言・終止形（過去・否定の終止形も含む）、用言・連

用形、用言・意志／推量形、用言・仮定形、名詞単独、
名詞＋格助詞、副詞単独、副詞＋格助詞、感動詞、ノダ、
その他

(3) 発話の種類

各発話の省略、倒置、質問形式のあらわれ方をみる。省略は助詞など、単語レベルの省略は除外し、当然あると期待される文の成分（特に述語）がない場合のみを省略と考えた。たとえば、「元気？」という発話には省略はないものとするが、「え、じゃ、なに、それを？（一どうしたのーなど）」は省略と考える。倒置は述語以外の成分が最終部分にある場合を倒置とする。質問形式は発話末に助詞「か」がある、発話中に疑問詞がある、発話末の音調を上げる、「かしら」「かな（あ）」を添える^(注2)という4要素のひとつでも満たしているものとする。

(4) 話題の展開

各資料を内容ごとのまとまりにわけ、話題がどのように展開しているかをみる。このまとまりを仮に話題部分と名付けた。ひとつの話題部分にはその話題に関する下位の話題がみられる場合もある。たとえば、Aという人物についての対話で、その人物の職業について、年齢について、住まいについて、趣味についてなどが話題になっている場合、Aに関連する部分全体をAについての話題部分とし、その中でさらにAの職業、年齢、住まい、趣味という下位の話題にわけるとする。

1. 4 分析の対象とする発話の範囲

言語形式の分析については各資料を前半・後半・後半にわけ、前中後から連続する30発話ずつを取り出して分析の対象とした。ただし、最初と最後の挨拶および相手を確認する部分は除外した。

各資料の分析対象部分（言語形式）

資料1（女性）	全 286発話中	90発話	計 434文節
資料2（女性）	全 342発話中	90発話	計 446文節

資料3 (男性) 全 300発話中 90発話 計 260文節

資料4 (男性) 全 226発話中 90発話 計 309文節

談話の進め方については、各資料の挨拶と相手の確認部分を除く全体を対象とした。

2. 結 果

2. 1 長 さ

資料1 (女性)	90発話	計 434文節	1 発話平均文節数	4.82
話者F1	56	333		5.95
F2	34	101		2.97
資料2 (女性)	90発話	計 446文節	1 発話平均文節数	4.96
話者F2	37	100		2.70
F3	53	346		6.53
資料3 (男性)	90発話	計 260文節	1 発話平均文節数	2.89
話者M1	46	145		3.15
M2	44	106		2.41
資料4 (男性)	90発話	計 309文節	1 発話平均文節数	3.43
話者M1	48	167		3.48
M3	42	142		3.38

女性の会話 (資料1 + 資料2)				男性の会話 (資料3 + 資料4)			
180発話	合計	880	文節	180発話	合計	569	文節
	平均	4.89	文節		平均	3.16	文節
	最大	27	文節		最大	24	文節
	最小	1	文節		最小	1	文節

文節による比較では女性のほうが男性よりも一発話が長い傾向になる。「うん」または「はい」という一文節からなる発話の数は男性49に対し、女性48とかわらないため、複数文節からなる発話は女性のほうが長いといえそうである。

また、厳密な比較ではないが、資料1（女性）は全 286発話で、12ページあるのに対し、資料3（男性）は全 300発話で、10ページにおさまっている。1ページの文字数は同じであるため、文字数からみても女性の発話のほうが長い可能性は高い。

興味深いのは、女性の場合、二人の会話でありながら発話の回数も長さも非常に不均衡な点である。発話数も長さも話者F1とF2、F2とF3の間には大きな差が見られる。だが、F1とF3の間にはあまり差はない。これを女性の会話の特徴とみるか、F2の個性の影響とみるかは難しく、さらに資料を増やして検討していきたい。

2. 2 終末部の形態〔表1〕

発話の終末部の形態としてあらわれたのは、用言あるいは助動詞の終止形、用言、助動詞の意志／推量形、用言の連用形、名詞および名詞に格助詞等の助詞が接続した形、副詞および副詞に助詞のついた形、感動詞、その他である。また、ことばが笑い声と重なって聞き取れないものが一例あった。

用言あるいは助動詞の終止形は、男性56例に対し、女性54例とほぼ同数となった。しかし、そのなかで名詞に「だ」がついた形は、男性26例対女性11例と、男性の使用例が多い。男性が「だ」形をもちいるのに対し、女性は「です」形をもちいるのではないかと考えられるが、この分析にもちいた会話資料はごく親しい友人同士のものであるためか、「です」形の用例は少なかった。だが、男性の「だ」形対「です」形が26対1なのに対し、女性は11対4となる。「だ」と「です」に関する限りでは女性の方が丁寧形「です」を使う比率が高い傾向があるようだ。

意志、推量の「う」をとともう形については用例が少なく、女性のほうがやや多いが有意差はない。

連用形は男性7例に対し、女性22例と女性のほうが多い。

それに対し、名詞および格助詞等のついた形は男性が34例に対し、女性は14例と男性のほうが多い。

副詞は用例が少なく、男性のほうがやや多いが明らかな差はない。

感動詞の用例は男性49例対女性48例とほぼ同数となった。これは全 180発話中の数値であり、感動詞で終わる発話が全体に占める割合は非常に高い。男女ともこのほとんどが「うん」である。電話による発話の特徴であるかもしれない。

〔表 1〕 発話の終末部の形

(注3)
*数字=使用回数 * () 内=単独使用回数

終 末 部		女性					男性				
		資料 1	資料 2	合 計			資料 3	資料 4	合 計		
		F1	F2	F2	F3	計	M1	M2	M1	M3	計
N+だ 形容詞 終止 動詞 終止 です		5(1)	2(0)	1(1)	3(1)	11(3)	4(0)	8(0)	10(1)	4(0)	26(1)
		3(1)	0	4(2)	1(1)	8(4)	1(1)	2(0)	1(1)	1(1)	5(3)
		14(1)	3(0)	3(3)	11(2)	31(6)	8(1)	5(2)	9(3)	2(1)	24(7)
		0	0	2(0)	2(0)	4(0)	0	1(1)	0	0	1(1)
でしょ でしょう だろう 意志/推量 う		1(1)	0	1(1)	0	2(0)	0	0	0	2(2)	2(2)
		0	2(2)	0	2(1)	4(3)	0	0	0	0	0
		2(0)	0	0	1(0)	3(0)	0	0	1(0)	1(1)	2(1)
		0	0	0	0	0	0	0	0	1(0)	1(0)
連 用 形	で	2(0)	0	0	0	2(0)	0	0	0	0	0
	て	8(1)	0	2(0)	9(7)	19(8)	2(0)	1(1)	2(2)	2(1)	7(4)
	ながら	1(1)	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	0
名 詞 + 格 助 詞	0	1(1)	3(2)	2(1)	3(3)	9(7)	5(3)	4(3)	6(4)	9(7)	24(17)
	が	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1(1)
	に	0	0	0	1(1)	1(1)	0	0	2(1)	0	2(1)
	から	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	1(1)
	まで	0	0	0	1(1)	1(1)	0	0	0	0	0
	で	0	0	0	1(0)	1(0)	2(1)	1(1)	1(1)	1(0)	5(3)
	も	1(1)	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	0
	なの	1(0)	0	0	0	1(0)	0	1(0)	0	0	1(0)
副詞+O		0	0	2(1)	1(1)	3(2)	1(0)	4(1)	2(2)	2(0)	9(3)
副詞+格助詞		0	2(0)	1(0)	0	3(0)	0	0	0	0	0
感動詞		6(6)	0(20)	16(16)	6(6)	48(48)	17(16)	10(10)	10(10)	12(12)	49(49)
のだ/んだ		9(3)	0	1(0)	7(3)	18(6)	4(0)	5(3)	1(0)	4(2)	14(5)
その他		2(1)	2(1)	1(1)	4(2)	9(5)	1(0)	2(2)	2(1)	1(1)	6(4)
不 明		0	0	1(1)	0	1(1)	0	0	0	0	0

2. 3 発話の種類〔表2〕

倒置は男性10例対女性9例であり、ほとんど差はみられない。省略は4対13と女性のほうが多く、質問形式は22対10と男性のほうに多い傾向がみられる。

〔表2〕 発話の種類

発話の種類	女性					男性				
	1	2			合計	3	4			合計
	F1	F2	F2	F3	計	M1	M2	M1	M3	計
倒置	4	2	1	2	9	1	2	2	5	10
省略	1	3	4	5	13	1	2	0	1	4
質問形式	3	2	2	3	10	2	7	5	8	22

2. 4 話題の展開

それぞれの対話を内容ごとのまとまり（話題部分）でみると次のようになる。話題A、話題B…、というのはそれぞれある程度独立した話題であり、a b c…はそれぞれの話題に関連した内容を持つ下位のまとまりを示す。たとえば、資料2（女性）の話題Aは対話者F2F3が共通して受けている授業に関する話題であり、aでは翌日は休講であるかどうかについて質問がなされ、bは授業での発表順、cは授業で扱う資料の話、a'で休講が確認され、b'で発表順が確認されている。そして話題Bは、夏休みに関するもので、夏休みをどう過ごしたかという話である。

資料1（女性）

話題A－a b c d a'

話題B－a b

話題A－a''

話題B－c

資料2（女性）

話題A－a b c a' b' d c'

話題B－a b c d e f g h i

話題C－a b c b' d e

話題D－a b

話題C - a b

話題D - a

話題E - a

話題F - a b

話題E - a

話題F - a b

話題A - d' c''

話題D - b' c''

資料3 (男性)

話題A - a b c d

話題B - a

話題C - a

話題B - b c

話題D - a b c d e f

話題E - a

話題F - a

話題G - a

話題F - a'

資料4 (男性)

話題A - a

話題B - a b c d

話題C - a b c d e d' f g h i

話題D - a b

話題E - a

資料2には、話題AとDが繰り返され、Aの中でもさらにa b c dは繰り返し話題にのぼっている。資料1でも話題A、Bが繰り返し話題になっている。資料3では話題Bの途中で話題Cが挿入されているが、これは話の途中で話者M2が電話の操作を誤り、その状況について話者M1に説明したためである。最後の話題Fの繰り返しは今度会おうといったことについての確認で、対話全体の締めくくりとなっている。資料4の中では話題Cのdが2度あらわれる他は、話題部分の繰り返しはない。男性の対話と女性の対話を比較してみると、女性の対話の方が繰り返しが多くみられる傾向がある。

3. 考 察

以上の結果をまとめると以下ようになる。

a 一発話の長さ

- 女性の発話は男性より長い。

b 発話の終末部の形

- 女性には連用形終止が多く、男性は名詞で終わる発話が多い。

c 発話の形

- 倒置は男女ほとんど差はない。
- 省略は女性のほうが多い。
- 質問形式は男性のほうに多い。

d 話題の展開

- 女性の方が同一の話題が繰り返される頻度が高い傾向がある。

まず、女性の発話のほうが長いという点だが、これは終末部の形とも関連するように思われる。つまり、女性の終末部は終止形では動詞が多く、そのほか意志・推量形と用言の連用形で、全体の38.9%を用言系のものが占めている。それに対し、体言系は16.1%である。一方男性は逆に用言系22.8%、体言系33.9%となる。ここから推測すると男性の発話は「何がなんだ」型の文型が多く、女性は「何がどうした」型が多いといえるのではないだろうか。男性の発話は断定的、女性の発話は説明的ともいえそうである。説明的な発話のほうが長くなるということは十分考えられるのではないだろうか。

また、女性の発話の終末部は連用形、または接続助詞のついた形が多いという点でも女性は断定を避け、婉曲に表現していることがわかる。この形は、もし相手がturnをとらなければ、いつでも発話を続けることができる形でもある。これも発話の長さに関連する要素かもしれない。

女性のほうが省略が多いという点は発話の長さとは関連しないかもしれないが、連用形や接続助詞での終止が多いことと同様に女性の発話には断定を避ける傾向がみられるといえそうである。

男性のほうが質問発話が多いという点だが、これは会話の運び方の特徴に関連すると思われる。分析の対象とした90発話は純粋なあいづちを除いたものだが、これをみると男性は二人がほぼ同じ割合で発言している。ところが、女性はひとりが一方的に話し、一方が聞き役にまわることが多い。具体的な

数字をあげると資料3（男性）ではM1の発話回数46、M2の発話44。資料4（男性）ではM1=48、M3=42である。対して、資料1（女性）はF1=56対F2=34、資料2（女性）ではF3=53対F2=37となる。男性同士のほうが質問形式を適宜もちいてなめらかにturnの交替をおこなっているといえるかもしれない。

さらに、話題の展開と発話の種類との関連をみると、話題の提示のしかたには、男性の対話と女性の対話との間に違いがあるようにみえる。資料2（女性）では話題の提示が8回あるが、新しい話題が導入されるきっかけとなった発話のうち4つは、連用形でおわっていたり、省略されていたりしてはっきりと言いきられていない。たとえば、話題Aは

（例）いえ、あのあの一、あしたの一、授業なんだけど、休講だったよねえ、と思って。

という話者F2の発話で始まっている。これは「授業が休講かどうか」という情報を暗に要求するもので、質問形式がとられてもいい発話であるが、婉曲に表現されている。残り4回の話題の提示のうち、2回は質問形式の発話となっている。資料1（女性）では、同じく8回の話題提示のうち、質問形式の発話が2回で、連用形も2回みられた。資料3（男性）は9回のうち、4回が質問形式、他は言い切りの形である。そして、資料4（男性）は5回の話題提示がすべて質問形式の発話でおこなわれている。

このように男性の対話では質問発話を契機として話題が変わっていくという傾向がみられるのに対して、女性の対話では話題の転換のきっかけとなる発話の特定の形式はないようである。この傾向と女性の対話には話題の繰り返しが男性の対話より多くみられるという傾向にはなんらかの関連があるのではないだろうか。つまり、男性の対話では質問とそれに対する応答という形で否応なく新たな話題が導入されているのに対して、女性の対話では上の（例）のように機能としては情報要求でありながら、形式的には質問形式ではない婉曲な表現をとることが多いため、相手が常に要求に答えるわけではなく、話題の方向が一度で定まるとは限らない。その結果同じ話題が何度も

繰り返されるということが起こるのではないだろうか。（例）の発話の場合でも、相手は自分も休講かどうか疑問に思い、別の友人に電話で確かめたという話から、その授業で発表する話や関連の資料の話などを経て、休講であることを確認している。

以上のように親しい同性同士の電話による対話という限定された場面のなかで、男性の対話と女性の対話には言語形式と談話の進め方に関して多少なりとも差がみられた。しかし、この結果には対話者同士の関係や個人の性質など、性差以外の要素も大きく影響しているものと考えなければならない。この例のみで女性の対話、男性の対話という一般化はできず、あくまでもこのような対話があったという参考として考えるべきものである。最初に述べたように、これは実際の資料の男性の話し手による発話群と女性の話し手による発話群の総和を比較して得られた差（男女差）であり、その差が性という属性が原因でうまれたもの（性差）であると断定することはできない。ここにあらわれた差が性差なのかどうかを確かめるためにはデータの量を増やし（話し手の数を増やす）、検討することが必要である。

しかし、この4つの対話に関していえば、親しい同性同士の女性の対話には婉曲に表現したり、断定を避けたりといった傾向がみられた。そして、そのことは談話の進め方にも影響をもたらしていて、言語形式だけではなく談話の進め方のストラテジーにも男女差があるという可能性を示唆している。

【注】

1. 女性の話し手、F2とF3は資料収集時点では大学院生であるが、二人ともそれ以前に数年間の職業経験をもっており、大学院に入学してからは半年ほどである。
2. 宮地（1980）および斎藤（1989）の基準による。
3. 単独使用とは終助詞等が添えられていない場合をいう。

【主な参考文献】

- 井出 祥子（1979）『女のことば 男のことば』日経通信社
- 井出 祥子（1981）「女の文章と女らしさ……木村治美の文章のケース・スタディー……」『ことばの社会性』文化評論出版
- 井出 祥子（1982a）「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座 文化と社会』第5巻，大修館書店
- 井出 祥子（1982b）「言語と性差」『月刊言語』Vol. 11, No. 10
- 井出祥子／川成美香（1984）「日本の女性語・世界の女性語」『言語生活』387
- 井出 祥子他（1985）『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書
- 小泉 保（1976）「女性の言葉」『月刊言語』Vol. 5, No. 5
- 斎藤 里美（1989）「日本語教育における疑問文・質問文—コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題—」『日本語学』Vol. 8, No. 8
- 堀井令以知（1991）『女の言葉』明治書院
- 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 宮地 裕（1980）「疑問表現」『国語学大辞典』東京堂出版

謝 辞

本稿は1992年度筑波大学大学院修士論文の第2章を修正補筆したものであり、修士論文をまとめるにあたり終始丁寧にご指導くださいました荻野綱男先生と、本稿をまとめるにあたり貴重なご助言をいただいた高田誠先生に厚くお礼申し上げます。